

戦中戦後の鈴鹿の暮らし

市民の証言でつづる「鈴鹿の記憶」

市制70周年記念事業として市文化課が制作した冊子「鈴鹿の記憶・戦中戦後の証言と資料」が、このほど発行されました。482ページもの分厚い冊子ですが、読んでみて引き込まれたのは、80人の市民に当時の暮らしのことを聞いて書かれた「証言編」です。75歳以上の市民5000人にアンケートを送り、回答された1539人の中から、インタビュー対象者を選定し、一人ずつ訪ねて聞き取りをしたという労作です。

面白いのは、市民が話したそのままの伊勢弁で、子どもころの生活や仕事、戦争と軍隊、戦後の復興の思い出が、語られたままに文章になっていることです。それぞれが住む所も家庭状況も、苦勞の仕方も全く違うのですが、それが80人分もまとまると、当時の鈴鹿市のことが、その全体像から細部までがよく見えてくるのです。専門家によってきちんと整理され書かれた歴史とは一味ちがう「庶民の歴史」です。もの言えない戦時中でしたが「その時わたしはこう思った」という、本音がそのまま話されているのも、「聞き書き」ならではの魅力です。

1942（昭和17）年、鈴鹿市は2町12カ村が合併して誕生しました。大きな海軍工廠を作るためだったのですが、その海軍工廠が操業した昭和18年にはもう戦争は下り坂。働き手の男は軍隊にとられ、工場は中学生や女学生の学徒動員が多く入っていて、作った機関銃や弾の7～8割が不良品だったと、何人もの証言があります。また、戦後の加佐登駅に大阪方面から買出しの人が殺到したこと、軍や工廠の跡に戦後次々と工場が誘致されていったこと、などの出来事がたくさん語られています。何とも不思議なのは、「昭和20年8月15日夜の記念写真」。青年たちが宴会を開きニコニコと、ほんとに嬉しそうに笑っています。戦争が終わったという開放感あふれる写真です。

この冊子は、6月に500部限定・2000円で販売されるとのことです。

市公共施設の「長寿命化」計画

高度成長期にどんどん作った道路や橋、公共施設の耐用年数がきて、その修繕や改築の費用負担が大きくなって、自治体財政を圧迫しているというニュースが多くなりました。鈴鹿市でも同様の問題をかかえていて、計画的に対処していくことが求められています。市として、この2年ほどの間に「橋梁長寿命化修繕計画」「都市公園長寿命化計画」「農業集落排水処理施設更新計画」が策定されました。

橋梁長寿命化修繕計画 市が管理している橋は900、そのうち長さ10m以上の143橋と、短くても重要な21橋、合計164橋を対象に点検、5ランクに「健全度」を評価して補修の順位を決めていきます。これまでの「ある程度損傷が進んでから直す」方式から、「傷む前、損傷の初期段階で直し、できる限り長く使い続ける」方式に転換することです。さらに今年は10m未満の250橋の点検も行ないます。

都市公園施設長寿命化計画 市が管理する公園321ヶ所のうち、大きな公園16ヶ所、街区公園165ヶ所の施設や遊具を点検し、健全度の判定、修繕や改築の方法、時期や優先度を決めていきます。

農業集落排水処理施設更新計画 市内18地区に整備された農村地域の下水道の処理場を、計画的に維持管理、更新する長寿命化計画で、今後40年を見通したものです。

さらに上水道についても、水道管の耐震化計画がこの3月に策定されていて、この計画の下に老朽管の更新を進めていく予定です。また、延長合計で180キロもある市道についても、維持管理の計画化が検討されています。

市庁舎や文化施設、学校や保育所などの建物についても、この長寿命化の考え方で計画的な維持管理をはかる必要があります。新たに建設する施設の費用と、すでにある施設の維持管理費用とのバランスや、予算の平準化を考えながら進めなくてはなりません。また、点検やランク付けも何年かごとに見直さねばなりません。さらに、予期せぬ大災害などは、この計画に入っていないから大変です。

それにしても「長寿命化」とは、いいネーミングだと思います。

伊船工業団地の用地価格引き下げ

鈴鹿市土地開発公社所有の伊船工業団地の用地（9.1ha）は、現在立地している企業4社に賃貸されています。その帳簿上の価格は、22億8800万円となっていました。これが今回11億3248万円に引き下げられました。いまの実勢価格に修正したもので、原価の半値になりました。バブル末期ごろに約11億円で買収、約10億円かけて造成工事した土地でしたが売れ残ったまま、その差額は開発公社の損失になります。この価格で企業に売却交渉する予定とのことです。

一方、西条の保健センター北にある駐車場用地（0.4ha）は、簿価3200万円から実勢価格1億6600万円に引き上げとなりました。

開発公社は過去の利益を準備金として23億円余保有しているのので、損失を市税で負担することはありません。ほかにも長期の保有地がまだ多く残っているのので、民間への売却や公共用への活用などの処理をさらに進めることが求められます。

今年も豊作ねがい、田植えしました

5月1日、深伊沢小5年生の児童といっしょに、学校のとなりの田んぼで田植えをしました。地域の団体「農光会」の行事として行なっています。風が強くて寒い日でしたが、子どもたちはワイワイ騒ぎながら田んぼに入り、大人に教えてもらいながら苗を植えていきます。だんだん上手になったところに、おしまいです。



小学生の田植え体験学習

秋にイネが稔ったら、またみんなで鎌を使って稲刈りをします。

3日、こんどはわが田の田植えをしました。と言っても、プロの同級生に5条植えの機械でやってもらい、所要時間わずか30分で終わりました。準備と後片付け、補植などに時間と手間がかかりましたが、本番はあっけないほど早く過ぎました。

昨年は10俵もとれる大豊作でしたが、今年はどうでしょうか？秋の取入れを楽しみに、水を切らさないように毎日見回り、畦の草を刈ります。自分が作った米のご飯は、格別です。



知って楽しい日本の言葉

話題の映画「舟を編む」は、新しい国語の辞書「大渡海」の編さんに取り組む主人公・馬締(まじめ)の、辞書完成までの15年にわたる地道な苦闘を追った物語である。おとし原作の本(三浦しおん著)を楽しく読んだが、これをどうやって面白い映画にするのか?と心配した。しかし映画は、本よりももっと面白かった。

この作品のもう一人の主演は、我々が毎日使っている「言葉」である。毎日朝から晩まで使っているのに、その正しい「意味」や「語源」などを我々はあまり知らない。しかし実は、一つ一つの言葉に、それぞれ長い歴史やドラマがあるのだ。

「オッス」は「オはようございます」の省略語

「舟を編む」に刺激されて、「この日本語の語源を知ってますか?」という本を読んでいる。何気なく使っている言葉の、意外なルーツに「へー」と感心することばかりである。いくつか事例をあげると・・・

「大きなお世話」 「世話」は当て字で、もとは「忙(せわ)」しいと書いた。

下手に親切にされると、せわしくて迷惑だとの意。

「出鱈目」 これも当て字。「目」はバクチのサイコロの目のこと。

「六甲山」 大阪から見ると、神戸の「むこう」に見える山に付いた名。

「足を洗う」 昔インドでは、仏教の僧侶は裸足で托鉢し、寺に帰るとまず足を洗い清めた。そこから、ヤクザが堅気になるとの意味になった。

「中国地方」 昔の日本の中心・京都から見て九州は「遠国」、関西は「近国」と呼ばれていた。その中間に当たる所だから「中国」。

「お払い箱」 もとは「御祓箱」と書き、伊勢神宮から諸国の信者に毎年配られたお祓いの札や暦を入れた箱。前年のものが不要になった。

「お転婆」 オランダ語でジャジャ馬娘のことを「オンテンバー」。

「オシャカ」 金細工の失敗の原因は「火が強かった」。江戸っ子が言うところ「しがつよかった」 「4月8日」 お釈迦様の誕生日

私も言葉で仕事をしている一人だが、なかなか面白くてしゃれた、そして本質を突いた表現は出来ていない。もっと辞書を読んで精進しよう。